

審査の結果の要旨

氏 名 角 田 真 弓

本論文は「明治期建築学における知識と技術の受容」と題されたもので、明治期における西洋技術と情報の移入と受容の過程を、建築に関わる「学」の形成をとおして再検討するものである。必然的に、大学内の教育内容に深くかかわることになるが、大学内部で生産された大学一覧・年報・蔵書目録・備品台帳、さらに大学内部に所蔵される各種の教材・教育成果品を素材としたことが大きな特徴である。

本論文は、全4部からなり、序章、14の章、結章で構成される。

序章では、研究の背景、目的と構成、資料群について説明し、従来の研究状況を概観する。

第1部（1、2章）では、明治初期の高等工学教育機関について検討する。工部大学校と東京大学理学部が設立され、それぞれ工学教育を開始した。両校は明治19年に帝国大学工科大学として統合されるが、生徒は工科大学の方が多数であったが、教員は東京大学側に主導権があったことを明らかにした。また、教育においては、実習重視であって、大量の教材が博物館や列品室に蓄積されていたことを明らかにした。

第2部（3～7章）では、明治期の建築学形成期における、教育の内容について検討した。帝国大学工科大学の建築教育の中心にいた中村達太郎の建築書『建築学階梯』を取り上げ、建築書の内容から建築学形成の過程を整理した。後の瀧大吉『建築学講義録』を生み出し、さらに明治37年三橋四郎『和洋改良大建築学』でその内容は、完成したという。また、関野貞の履歴と教育を追うことにより、建築史に留まらず美術史、工芸史までも広く扱った過程を明ら

かにした。さらに、地震学の発生と建築専門家の関わりについては、日本地震学会から震災予防調査会への動きを解明し、佐野利器が鉄骨構造から構造学を構築する状況を検討した。建築教育においては、大正4年から構造班、意匠班という二つのグループに分けて教育が進められたのだが、内容の実態は大差ないものであったという。

第3部(8～10章)は、当時「自在画」と呼ばれた、建築学科生であれば実習を行った「スケッチ」、「模写」に着目し、建築教育との関係を明らかにした。工科大学では辰野金吾の指示で、模写の教育が行われたが、工部美術学校出身の曾山幸彦が担当し、美術学校と同様の内容をもった。学外実習で、建築記録の方法としてのスケッチ、彩色模写、実測図面を教授し、写真の代用品ではなく必要情報をわかりやすく記録する方法としてスケッチが用いられた事実を明らかにした。学外実習が建築理解の方法として定着することで、建築独自の記録方法として確立する。また、彩色模写の対象である文様に着目し、『文様集成』刊行の背景と模写図蒐集を通して、建築学における文様図案の位置づけを明らかにした。

第4部(11～14章)では、「用器画」と呼ばれた図学に着目し、建築教育、美術教育における図学教育の位置づけを明らかにした。用器画(図学)が理論として日本に移入されたのは、開国後のことであり、基礎教育機関では用器画を幾何学の延長として捉え、美術学校では画法の一つとして捉えており、両者の目的は異なるが、いずれも基礎教育段階での修学であった。

東京美術学校では、建築科、図案科が設置されたが、その背景をフェノロサ・岡倉天心の構想当初からの動きを通して明らかにした。両氏の思惑は異なり、さらに殖産興業という政治的判断も加わり、結果として明治29年「工芸図案家」と「建築装飾図案家」の育成を目的とする図案科が設置された。

明治19年以降における高等基礎教育機関での図学教育の実態については、工学教育においては旧制高等中学校が工学基礎教育を担い、図学教育を担当した。美術教育では、普通教育における図画科目存続のため、正木直彦により他業種にも役に立つ図画である「用器画」と位置付けられることで、図画科目は存続した。工学基礎教育機関である旧制高等中学校、そして美術教育機関である東京美術学校の双方で図学を担当したのは小島憲之であった。

最後に、明治期の高等教育機関の図案科の比較を通して、図案科の職能を明らかにすることで、建築学科の特質を捉えた。設置当初より様々な解釈がなされた「図案」の領域は定まらず、本来であれば各分野を横断的に総括したはずの「図案」学が、図案科としての確立を求めたことにより、姿を消してゆく結果となった。

本論文は、明治期における建築学の成立から展開までを、工科大学の実際の教育体制について精度の高い調査によって描いたもので、初めての本格的な建築学教育史と言ってよいだろう。また、大学内部に蓄積された、多種の活字資料、教材、さらに学生による多数の成果品を丹念に調査することによって、教育内容にまで踏み込んだことに大きな特徴がある。東京大学に限らず、東京芸術大学、京都工芸繊維大学他に所蔵される資料との比較検討を進めたことによって、明治期の図学、図案学について、具体的な像を描くことが可能になった。

よって、本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。